

葬儀用花きの新たなトレンド

東京事務所行政課農産物プロモーショングループ

2025年9月10日（水）から11日（木）にかけて、有明GYM-E Xで「第11回エンディング産業展」（主催：東京博善株式会社）が開催されました。

葬儀祭壇や供花、墓花など終活（エンディング）産業で用いられる生花に関連した出展を取材しましたので、その概要を紹介します。

1 消費者ニーズに寄り添う生花祭壇

祭壇の展示会場では、株式会社フォーシーズンズ（神奈川県）がオリジナルデザインの生花祭壇を展示していました。祭壇は白色と紫色を基調として、カーネーション、トルコギキョウ、アルストロメリア、バラなどで装飾し、故人の好みや人柄、故人への想いに寄り添った自由な祭壇になっていました。一般葬に加えて、一日葬、家族葬と葬儀の形式が多様化する中、今後、このような自由な形の生花祭壇がトレンドになると感じました。



自由なデザインの生花祭壇



祭壇のラインには、白いバラとカーネーションを使用

2 世界中から集荷される仏花、墓花

葬儀用花材の展示会場では、株式会社ジャパンプランツ（岐阜県）が仏花、墓花の花材を出展していました。同社の仏花、墓花は主に量販店に向けて販売され、スプレーギク、カーネーション、リンドウ、スターチスなど多様な種類が使われています。

担当者からは「東北や北海道など、他の国内産地に比べて夏季が冷涼な産地でも、近年は夏の暑さで品質が不安定になることがある。東南アジアの産地では、コロナ禍による生産停止を機に労働者が国外に流出してしまい、品質が不安定になった。」と近年、品質の安定した花き産地を確保することが難しくなっている実情が説明されました。

今後は、品質の安定した花材を消費者に提供するため、国内外問わず、季節ごとに、世界中から多様な品種の切り花が仏花、墓花として広く流通する可能性があります。

エンディング産業に用いられる生花は、種類、色、丈など、今後さらに多様化していくことが予想されます。輪菊だけでなく、あらゆる種類の花きが、エンディング産業の現場で使用される可能性があることを当グループと産地とが情報共有をすることによって、需要とのマッチングに繋がることが期待されます。